

Title	聖フランシスコ・ザビエルの列聖文書
Sub Title	Bulle of the canonisation of S. Francisco Xavier, celebrated by Gregory XV
Author	樋口, 勝彦(Higuchi, Katsuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.23, No.4 (1949. 6) ,p.1(397)- 22(418)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ザビエル研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19490600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖フランシスコ・ザビエルの列聖文書

樋口勝彦譯

まへがき

聖フランシスコ・ザビエルは、一五五二年十一月二日の明方二時頃、廣東の近く上川島で、その靈を天に返した。而して彼が歸天して六十七年目の一六一九年十月二十五日、教皇ピエロ五世によつて、福者の列に加へられ、次いで一六二一年一月二十四日、教皇グレゴリヨ十五世によつて聖人の位に陞せられ、同三月十一日、ペトロ大聖堂に於て盛大な列聖の祝典が舉げられた。この列聖文書は、レオン・バジエスのザビエル書翰集 Léon Pagès : Lettres de Saint François.

序言——羅馬教皇聖下の叡慮より發せられたる文書が、教皇聖下突然の薨去の爲に、上(教皇)より下されたる教皇教書と定められるに至らなかつたとは云へ。その當然受く可き効力を得たるは、まことに道理に適ひ且つ公平の理にも合つたことである。

十數年前畏友樋口勝彦氏に委嘱して稿成り、後、司祭チースリク師の校閲を得たのである。併せ記して兩氏に對し深甚の感謝を捧げる。固有名詞の読み方が總てラテン読みになつてゐることをお斷りしておく。(吉田小五郎)

グレゴリウス十五世に依つて舉行されたる聖フランシスкус・クサヴエリウスが謚聖の大勅書

神の僕の内の僕、司教ウルバーヌ此の舉を永遠に記念せんが爲に。

座より此の世に降り給ひし時、此の世界に彼の教への善き種子を蒔き給うた。その種子をして（神を）信する者の裡に、天上のあらゆる種類の徳と云ふ果實に、又永遠の命と云ふ窮屈の果實に迄成長せしむ可く。さらに又、自ら進んで十字架の恥辱を受け給ひて、此の神の畑の收穫の爲に、いとも貴き御血を流し給うた。そして果す可く御降り給うたその使命を遂に果し給ひて、天國のすべての莊嚴なるものの上に君臨し、未來永劫に御父と並びて（玉座に）坐し給はん爲に昇天し給ひし時、大部分の僕と友とを此の地上に遣し給うた。そは之等の者をして營々の努力と不眠の丹精とを以て、はた又彼（キリスト）の範に倣ひて剩へ自らの血を流してまでも、神の此の種子を終始養ひ育て、その收穫を能ふ限り豊かにし彼が倉に收納せしめんが爲であつた。又、父（なる神）の約言に副ひ、此の世のあらゆる民と此の世界のすべての果が彼（キリスト）に繼承され、支配されるに至らんその時まで、彼（キリストの教へ）の地域を擴めさせんが爲であつた。

そして、彼（キリスト）の言葉が過ぐる代來る代、常に榮え來つたとは云へ、久遠の昔より豫め既に定められてゐる彼（キリスト）の恩寵至福の御代——そは彼の大いなる御慈愛を、恰も雨の氾濫する如く、アダムの子孫に

悉く行きわらせ給ひ、又彼の十字架の光榮を世界の果迄も及ぼし給ひ、遠く海の上にも擴げ給はんその時こそ、はじめて眞にいみじくも彼の御力が行はれた時と云ふ可きである、その時こそ、以前には知られなかつた民族や言語や又人種や國々が發見され、そこに大いなる豊かな收穫を生ぜしめ給ひ、その收穫の中に働く働き手を増加し給ひ、彼等の傳道に依り福音説教の聲が世界の果まで響き渡るに至ると云ふ、かゝる大いなる豊かな成果を以て彼等の勞働を満し給ひ、日出づる東の果から日没する西の果迄、又アキロー（北方）から海洋迄、世のあらゆる民の口に我等が主なる神の大きいなる御名が衍するに至る時である。

主がその御神意の秘蹟を遂行せしめんが爲に、斯くも多くの民族を御召しになる爲に、豫め定め給うた布教者の數ある中で、印度人（に布教す可き）の新傳道者、主のすぐれたる僕（フランシス・スクス・クサヴェリウス）こそは、その崇高なる聖性（Sanctitas）と、輝しい高徳との點に於て殊に抽でてゐた。彼は青年時代より、完全に神の御前に精進してゐたが爲に、富を蔑視し去り、世俗の名譽の位置を排し、主の御言葉に従ひ己れを全く没却して、我等の主の御名に依り、我が魂をイエズス・キリストに獻げてゐたがために、彼は聖靈（のはからひ）に依

り斯くも崇高なる聖職に任せられ、又神聖なる御攝理に依り他の僧侶兄弟の云はば首長の位置に立てられ使徒の（受くべき）聖寵を豊かに恵まれるに相應しい者であることが認められた。なほ更に、彼に就いてのあらゆる點の

證査にも、又表はれにも、又異常なる奇蹟にも、又徳にも十分使徒たるの資格の表はれがあつたと云ふ事が明かにされて、その使徒たる資格の表はれに依つて、全世界の基督教徒の一致せる承認の下に新民族の使徒と呼ばれる資格ありとされるに至つた。此の故に神の榮光の爲に且つ又我等が主イエズス・キリストの御血に依つて贖はれたる（人類の）魂の救ひの爲に、數へきれない激甚なる勞苦と辛酸を忍び、陸に海に限りない危難に遭遇し、（遂に）神彼をして、——その名あらゆる民族の口に乗（り尊敬され）るに至つた程、——しかく偉大ならしめ給うたる斯くも偉大なる神の僕を、

SS 1 此の彼を、我が先輩の教皇グレゴリウスがその聖職（教皇たる）の権限に則つて、戦鬪教會（Ecclesia militans）（現世の信徒）に向つて、此の彼こそは眞に聖者であり、神に選ばれたる者である、と宣言したのは（まさに當を得たことであつた）、そして彼の徳は優れたる崇高なるものであるが故に、キリストの信徒の誰しもすべて模範となす可きものであり、キリスト教國民は彼を

模範として自分の行動を一途に神の榮光に向つて進め、不幸困窮に際しては、彼を我と神との又我と主イエズス、キリストとの仲介者となさんやう懇願したのはまことに當を得たことであつた。

そして、すべてのキリストの信徒をして、彼の數限りなき偉大なる業績に刺戟され、全能の神をますます熱心に讃へんと勵ましめん爲、且は又、此の世に於ける天上の如き彼の生涯、嘆稱を受くるにふさはしく終始したる彼の生涯を全世界に發表し、明かにし、以て（人々の）此の偉大なる神の像に對して抱く（深い）獻身的の熱情を一層たかめん爲に、グレゴリウス教皇は、先づ第一に、何よりも次のやうな事（彼の傳記）を先きにした、即ち神の此の優れた僕はナヴァールのパンピロン（パンプロナ）教區の、母方の縁戚の領土に屬するクサヴェリウスと云ふ城の、敬神の念篤き貴族の兩親より生れた。兩親は、極く幼い時から彼に神を敬ふこと、あらゆる罪を避けることを訓へて遂に青年に達するに及びパリへ學問をさせる爲に留學せしめた。彼は學問に熱心に没頭したが、その後間もなく父は彼を家へ呼び戻さうと考へ出した。この事を、その當時慈善事業につくしてゐた彼（クサヴェリウス）の姉で、ヴァレンティーナ教區のガンディアと云ふ名の町にあつた、サンクタ・クラーラの會（Sanct-

ae Clarae Ordo) に屬する、ディスカルケアータエ(既足の女達)と名付けられてゐた修女を容れてゐた修道院をその頃治めて(——の院長をして)ゐて、聖性の譽れ高かつたマリア・マグダレーナが知つたので、弟の神の仕事に携はる可き天稟を熟知してゐた彼女は、父に熱烈な手紙を送り、何としても、假令へ家庭的な問題を犠牲にしても、フランシスクスの切なる意向を極力支援し給へかしと懇請した。彼女は弟が、未知の民族の使徒たる可く、御神意に依り既に定められて生れ來つた者である、と云ふことを豫見してゐたためである。

パリに於て、聖イグナーティウスを知り親しくしてゐたので、遂に彼(イグナーティウス)の仲間に「——それ(クサヴェリウスの仲間入り)が教會の爲に殊に抽でて有益となるやう熱心な祈禱を以てイグナーティウスが神に御願ひ申上げて——入るを許された。そして彼(クサヴェリウス)は彼(イグナーティウス)を指導者として(——

更に、完全に二日或は三日の間完全に如何なる食糧をも全く斷つたことも屢々あつた。實に、又或る時は聖週間の日すべてを通じ聖土曜日迄も斷食が續いたこともある。彼は力を回復するのに、ゆかの上か、さもなければ極めて粗悪な床の寝臺に横たはつて、極めて短い睡眠しかとらないのが常であつた。鐵をかぶせた鞭を自分の體に、時に多量の出血を見る程強く加へたこともあつた。又或る時は、兩腕と腰を細紐を以て極めてきつく縛つて旅へ出たこともあつた、幾日かを斯くの如き苦痛を忍び通して來た爲に、苦痛の餘りにも甚だしきに、力を全く失ひ路上に倒れど程、その紐が彼の肉の中に食ひ込んでゐたことがあつた。そして若し神の特別な御寵愛に依つて、全く人間の力を加へることなくして、その紐が切れなかつたら、彼の生命は全く絶望であつたかも知れなかつたやうなこゝもあつた。

* ingressus arctam viam quæ ad vitam ducebatur stricta via quæ dicit ad vitam 馬太傳七・十四。

靈(の御力)に依り生命を與へられん爲に、彼は昔の聖者達の例に倣ひ、自らの肉體を極めて厳しく苦しめたからである。彼は肉や葡萄酒ばかりでなく、小麥の麵麩さへも断つた、そして唯だ粗惡にして無味なる糧を、それも出来るだけ少量攝るに過ぎなかつた。そればかりでなく

その他キリスト教徒としての諸徳が彼の魂の内に如何に著しく輝いてゐたことか、信仰と云ふ樁で守られて如何に力強く彼は惡魔のあらゆる焰の鎗を驅逐したことか、如何に強く神に希望を抱いてゐたことか、——など事柄、及び、最も切なる献身的な信仰と疲れを知らぬ

不撓不屈とのうちに彼自身のみならず他の（隣）人までも育み教ふるに屢々用ひた秘蹟の數々、又は世界の斯くも大いなる範圍に亘つて光明を與へた所の、神の御言葉を說いた彼の根氣強い布教、などの事實が明確に立證された。彼のその他の諸徳の内でも、就中彼の慈善 (Charitas) の心こそは殊に、恰も暁の明星の如く輝かしいものであつた。彼の慈善の心こそは、まことに、彼のあらゆる行ひの中に著しかつたが、彼が病者に仕へてゐる時殊に顯著なものがあつた。（慈善）病院に收容されてゐる貧しい病者に對しては、そのそばを離れた事が殆んどなかつた程、強い情熱的な慈愛を以て仕へた。見るも恐ろしい不治の潰瘍を洗滌してやりその水を飲んだことも屢々あつた程、それ程の感覺を殺した態度を以て、如何に汚い事でも病者の助けとなる事なら何でも行つてやつてゐた。病人が危篤に瀕した時には、全く寢食を忘れ、神の御力にて（自然の）力を超越して強くなり、恰もそれが自分に課せられた事でもあるがのやうに考へて、その看護から夜と云はず書と云はず離れなかつた。又彼等（病者）に教會のいとも聖なる秘蹟 (Sacramentum) 及びその他精神的な薬を施した、彼は此等の事を爲すのに、病者や瀕死の人々に仕へる事は彼の無上の歡喜であると云つたゆうな、又は神の豊かな御慈愛が彼

に（行ふ可しと）託し給うた或る能力を行つてゐる、と信じてでもあるかのやうに、嬉々として勇んで行つてゐるのである。そして病者に對する彼の斯くの如き撓まざる心づかひと不眠の看護とは、彼の全生涯を通じて、何地に居た時でも、絶えず行つてゐた。聖靈が彼の心に注ぎ給うたる斯くの如き彼の慈善心を通して、彼は神に近づいて行き、又魂の強い情火を以て祈りに精進して行つた、斯くの如き心の糧——その糧を以て彼は心の中の（内面的な）人間を建設し直してゐたのであるが——に養はれて張り満ちて幾夜も祈りに夜も徹した事があつた位であつた。又船中につけて、極めて激しい暴風の折、明かり死が目睫の間にせまつてゐる危險の中に於ても、彼は（祈りを）廢せず、心に何ら動する所がなかつた位であつた。又或る時は、眼を天に固く据ゑた儘、神の御力に依り地上より宙に浮き上つた位、我を忘れた放心狀態（恍惚境）の（發作が）起ることもあつた。全く天使の慈愛その儘を表はしてゐる位彼の面貌は光り輝いたこともあつた。又神の愛の強い火に耐へ難く、彼は叫んだことも更に一層屢々あつた、「充分なり、主よ、充分なり」と。いとも聖なる彌撒の供物 (Sacrificium) の式を行つてゐる最中、彼は全く知覺を失（無我の恍惚境に入つて了ひ、他の宣教師達が彼の服を擱んで搖ぶつても、

長時間の間、彼を醒すことが出来なかつたやうなことが屢々あつた。それのみか、大勢の人々の立つてゐる中で彼が一クビトウム (Cubitum ひぢの長さ、約一尺五寸) 以上も高く、地上から浮き上つて、居合はせたすべての人々がこれを見、斯くも偉大なる奇蹟に果然となつて、此の神の僕の聖性をたゞとび見上げたことも一再ではなかつた。

此の聖なる人は、夜を徹して神を心の内に思ひ、或は口に語つてゐたこともよくあつた、それのみか、眠つてある間も彼は神の内に休息してゐたのであつた。と云ふのは彼が夢の中でイエズスのいとも聖なる御名を、喜悅あふるゝ心を以て、口にするのが屢々聞かれたからである。

又、斯くも著しい數々の徳に満ち、更に日に増して神より益々善き御恵みを増し與へられてゐながら、彼は心おござれるのみか、彼の心の内には絶えず謙讓の徳が増大して行つた。即ち、恰も誰よりも最も身低き者であるかのやうに、何んなことでも家の最も下賤なる仕事を彼は行つてゐた程であつた。衣服は襤襤々々の粗惡な物を用ひ、爲に、時として小兒達の嘲笑の的となつたこともあつた程であつた。

此の神の人は、然し、啻に司教 (Episcopus) に對し

てのみならず、又誰に限らず司祭 (Sacerdos) に對してすべてに極めて深い尊敬を拂うてゐた。又當時彼の先輩であつた聖イグナーティウスに對しては必ず膝を屈して手紙を書き送つてゐた。(世俗の) 名譽や人々の賞讃をして手紙を書き送つてゐた。彼は印度に派遣されるに際して彼は極端に嫌つてゐた、彼が印度に派遣されるに際して最高位の教皇より任命されたる、教皇使節といふ名譽極まる資格 (——尊稱? dignitas) を極めて細心の注意を以て秘め、僅かに一度に限り、然も(絶対の)必要にせられて、此の(資格の) 權能を行使したに過ぎなかつた程であつた。

* Apostolicus Nuntius, nonce apostolique = 教皇特派大使

斯くも偉大であつた此の人は、その行程の最後まで常に華々しく、且つ(遂には) 正義の榮冠を得可く、奮闘せよど、神の與へ給ひし行路(生涯)を進んで行つたのであつた。

§ 2 ルスイタニア (Lusitania) (ポルトガル) の、想ひ起せば顯著なる故ヨアンネス王が、先に述べたグレゴリウス教皇の先輩であり、且つ余にも亦先輩なる想ひ起すも敬虔なる故パウルス・ペペ三世に懇願して、聖イグナーティウス一派の中の何人かを東洋の印度へ派遣する途中、彼(ヨアンネス王)の極めて廣大なる諸地方に神の御言葉を布教せん目的で、通過せしめて戴き度いと。

それでその（パウルス）教皇は、聖イグナーティウスの推薦に従ひ、此の重大なる事業を遂行せしめんがために、更に、（パウルス）教皇使節と云ふ（名譽なる）資格と、極めて廣汎なる權限とを授けたのである。そして教皇執事（Fraetor regius）の取計らひに依り旅費と云ふ名目で、極めて莫大な金額が彼に支給されようとした時に、此の人は、神より選ばれてその福音（を布教せんとする）の事業を遂行せんとする——その神の御慈愛は（必ず）旅費や給料に代るものをお恵み下さる（に違ひない）信じてゐたので、最も粗悪な艦縷服以外には、何物たりとも断じて受けた事を肯じようとはしなかつた。そして船中では、いつも船の綱具の上に寝てゐた、喜捨された物を食して暮してゐた。病者に對しては疲労を知らぬ慈善心（Charitas）を以て、夜と云はず晝と云はず、最も賤しき事にも當つて、仕へてゐた。

印度に到着するや否や、非常に長い且つ困難を極めた航海の後の、疲れを癒す可き僅かな時間の休息をさへも取らず、直ちにそこの人々に福音を説教せんために近づいて行つた。上天より授かりたる德を身に帶び、使徒に相應はしき心の火に燃えて、彼は、自分に與へられたる任務を遂行し、大いなる成果を齎した、その成果たるや、

即ち、神の御恩寵（gratia）も彼（クサヴェリウス）の説教に有効に御協力下さつたのと相俟つて、彼は、東洋到る所全般に亘つて墮落せる基督教徒の道徳を、立派なものに呼び返らしめたばかりでなく、更に、（これまで）暗黒の中に或は又死の陰にさ迷うてゐた、幾十萬の人々を導いて眞の光を知るに至らしめ、再生の洗禮に依り淨化されるに至らしめた程であつた。

その國々に於ては、その昔、曾ては福音説教が榮えたことをもあつたが、人類の敵の偽瞞の策略に依り、總ての人々から完全にその（福音説教の）記憶を失つて了ふに至つてゐた、さう云ふ民族、即ち印度人、ブラークマニア人（Brachmanis）、マラバーリア人（Malabares）などがクサヴェリウスの説教に依つて信仰を復活したのは云ふに及ばず、それ以外に。彼（クサヴェリウス）は自身パラヴィス（Paravi）、マライー（Malai）、ジャイー（Jai ジャワ）、アケーニー（Acceni）、ミンダナイー（Mindanai）、マラケンセース（Malacenses）及び日本人達に、始めてキリストの福音を述べ傳へたのである。そしてそれ等の國々の君主や、勢力ある領主でキリストの有難い輒に首を垂れた（有難い支配に服した）者が多數あつた、これは我々の宗教にとつて大いなる利益となつたのである。

我等が主イエズス・キリストの御名の爲に彼（クサヴエリウス）が忍んだ所のもの（苦難）こそは信じ難い程のものであった。世界のあのやうな廣大なる地域に亘つて、諸々の國を經巡り、常に徒步で、屢々跣足で焼けつく砂地を歩き廻つたのである。茨の中を彼は最も長い旅を果して行つた。數へ切れぬ程屢々彼は、辱しめに、罵詈に、嘲笑に、打擲に、投石に遭ひ、又敵の謀つた危害に、

旅の危險に暴されたこともあり、時には難船、徹夜、寒氣、或は裸體、飢、渴などの苦しみを忍び通し、更に撓まざる過度の勞苦に起因した極めて重い病氣に罹つたこともあつた。使徒を模範として、彼の受けたる布教の任即ち神の御恩寵の福音を説き明かす事なる彼の行程を果し、以て肉體よりも魂の方を重んじてゐたのである。

S 3 教會の生れ出た初期に於て、主は使徒等の説教を確證し給はん爲に、種々なる奇蹟や不思議を表はし給うことがあつたが、此の新しい民族に吹き出でた信仰の芽をのばし給はん爲に、御慈愛厚くも御僕フランシス・クスの手にも此の奇蹟や不思議を行ふわざを新たに授け給うたのである。

彼は種々未開の民族の言語を、それ迄は全く知らざりしに、神の御教へに依り忽ちの中に會得して、恰もその地方に育つた者でもありはしまいかと思はれる程縱横無

盡にそれ等の言葉を語つてゐたのである。又或る時は斯う云ふ事があつた、と云ふのは、彼が種々相異つた民族の集つた聽衆に對して説教した時、聽衆の一人一人が同時に各自自分の生國の言葉で神の偉大なる御事蹟が語られてゐるのを聞いて一同全部呆然として聞き惚れた。斯くの如き奇蹟に大いなる聽衆は深く感動させられて神の御言葉を信するに至つた、と云ふ事である。

此等の事が此の地方から（聖廳へ）報告されるに及んで、彼（グレゴリウス教皇）は、主が彼（クサヴエリウス）の説教と事業とを顯著ならしめ且つ表はし給うたる種々極めて著しい奇蹟や不思議なるわざの中から幾つかを取出したならば、キリストの信者にとつて有効なる材料となるであらうと考へられたのであらう。

で先づ、第一に銘記す可しと思はれたのは、バダーガ（Badaga）の多數の軍隊が、フランシス・クスより洗禮を受けるキリスト教徒を根絶しようと脅し、キリスト教徒にありとあらゆる暴虐を加へんと脅迫した時に、信仰の爲に武装された彼は獨り敢然と彼等の前に進み行き、厳しく彼等の暴行を咎めた。軍隊は全部一様にその場に立ちすくんで——將も兵も後に語つた所に依れば、それはフランシス・クスと相並んでゐた黒衣を纏うた或る大きな人のためであつた。此の人物の莊嚴さ、その相貌や眼

から放たれてゐた、燐然たる光に彼等は堪へ得なかつたのである。斯くて此の聖者（クサヴェリウス）は彼がキリストの子となしたる人々を殺戮と掠奪との運命より助けるを得た。

その後又、コモリースム岬（Comorinum）に於て、此の神の僕は或る教會で異教徒達に説教してゐて、彼等の心の硬さ爲何等の効果も望み難かつた時。彼は祈禱を行つた後、その前日死亡して埋葬された墓を開くやう命じた。彼は人々に向つて、キリスト教の信仰の眞なる事の證（あかし）を立てんために、此の死者が、神の御意志に依つて再び甦るであらうと云ひ、死骸を包んであつた布を裂き、神に再び祈禱を唱へた後、死人に向つて甦れと命じた。死人は立所に一同皆の驚嘆の裡に甦つて起ち上つたのである。斯くの如き顯著なる奇蹟に感動させられて其の場に居はせた者も亦その他の者も神を信するに至つた者が非常に多く出來たのである。

その後、又その同じ場所で、體一面に潰瘍の出來た或の乞食が此の福者（クサヴェリウス）の前にやつて來た。フランススクスは深く憐愍の情に動かされ、その者の傷を洗滌してやり、その洗滌の水をみな飲み干し、然る後慈愛に満てる父なる神に、此の哀れな者をあはれみ給へと祈つた。すると直ちに、神の御恵みに依り此の乞食は

すべての傷すべての潰瘍から完全に癒ゆるに至つたのである。

又東洋印度のムターヌス（Mutanus）に於て或る子供が傳染病の熱の爲に命を奪はれ、その民族の習慣に従ひ布に縫ひくるめられ廿四時間の間守られた後、兩親の涙の裡に墓所へ運ばれて行つた。之等の人々を神の人（クサヴェリウス）は見たので、彼等に對する憐愍の情抑へ難く、此の子に命を與へ給へと全能の神に跪いて祈りを捧げた。そして聖水をその上に注ぎ、布を裂いて、（その子に對して）十字架の印をなした。そしてその子を手に取り、主イエズス・キリストの御名に於て甦らしめ病氣を癒してその兩親に返した。その土地には斯くの如き偉大なる奇蹟を記念する爲にその土地の人々の手に依つて盛大な儀式を以て十字架が建立されている。

その後又、コンブトゥーラ（Combuttura）の町近くの漁場の灣内で或る子供が井戸に落ちて、溺れ、母親や知人の大いなる歎きの裡に引き出された。フランススクスはその附近の教會から出て来てぱつたり出會はし、彼等に同情のあまり、跪いて、眼を天に向け、その子の命の爲に神に祈り、その子を手に取り主イエズス・キリストの御名に於て起てと命じた、すると直ちにその子は息を吹き返して起ち上つた。此の聖者（クサヴェリウス）

はその子を、一同啞然としてゐる中で、母親に返した。

人々は一同大聲を揚げて神に感謝した。彼は皆に對つて此の事は誰にも語つてはならないと教へた。

更に、フランシスクスがキリストの信仰を日本の群島に於て布教してゐた時。或る長年盲目になつてゐた一人の商人が彼の前にやつて來た。そして神の御力に依り再び見る事が出来るやうにしていただき度いと懇願した。

フランシスクスは、彼の上に福音を朗誦した後、彼の眼の上を十字のしるしを書いて押へた。するとその瞬間に失つてゐた視力を取り戻した。翌日彼は妻と家庭全體を引き連れて再び彼（クサヴェリウス）の許に來り、跪いて感謝し、キリストを信仰する旨を告白し、家族一同と共に洗禮を受くるに至つた。そして斯くも著しい奇蹟の評判がその國中に廣まり。今迄の偶像を捨てゝ眞なる神と、御子イエズス・キリストを信するやう改宗した者が非常に多く出た。

此の神の僕（クサヴェリウス）が五百人も乗つた船で支那に渡つた時のことである。風が全く途絶えて十四日間もの間、船は同じ場所に固定した儘全く動かなかつた。種々なる困難がその他にもあつたが、別して眞水の缺乏に人々は非常に難澁じて、渴の爲にも早や衰弱して行く者が續出して來た時。此の聖者は總ての器に海水を充满

せよと命じ。熱心に神に祈禱を捧げ、（水を満した）器の上に十字のしるしを書いた。すると忽ちにその鹹水は美味なる衛生的な眞水に變ぜられた。此の奇蹟の爲に船中に在つた異教徒は大部分神を信するに至つた。のみならず此の水が澤山餘つて、印度の方々の地方で、種々なる病氣に悩まされてゐた人々が、此の水を飲んで治癒した者が非常に多くあつた。

同じく支那に向つての旅で、極めて猛烈な暴風雨が起り、人々は總て最期が來たと考へてゐた時、舵手が、突然の力に依つて端艇が奪ひ去られはしまいかと懸念して、それを頑丈な綱で船體に縛りつけさせておいた。すると程なく綱が切れて、暴風は非常な勢ひでその端艇を奪ひ去つてしまつた、一瞬間にして皆の視界から消え去つた程の早さであつた。その端艇の中に親類の者や知人を持つてゐた人は誰しも皆それ等の者の不幸を痛く歎き悲しみ始めた。フランシスクスはそこで一様に歎き悲しんでゐる皆に元氣を持てと奨め。娘は三日の後に母の許へ歸るであらうと豫言した。それは端艇が本船に歸つて來るであらう、との意味であつた。遂に神の御はからひに依り端艇は見え始め、一直線に本船に向つて來た。そしてひとりでに本船に近づいて來た。而もその中に乗つてゐた者は全部苦もなく（本船に）救ひ揚げられた程、

(端艇は) ピッタリと (本船に) 附着したのであつた。然も本船に繋がれる間、波間に在りながら誰一人押へてゐる者もなかつたのにちつと動かすにゐたのである、人々は此の奇蹟にしばし呆然としてゐるのみであつた。

更にフランシスкусはモルカ島 (Moluka) へやつて來て大いなる熱情を以て神の御言葉を此の地に始めて說いた。

そしてトロ (Tolo) の町に於て二萬五千人に上る人々に洗禮を施した。此の信徒達がその地の或る暴君の使嗾に依りキリストの信仰を放棄し、教會を地上に倒し、十字架や聖者等の像を破壊し足にて踏みにじるに至つた時。フランシスкусは主に對する熱情に燃え、葡萄牙人廿人と土地の者約四百人を、斯くも甚だしき罪を膺懲せん爲に蹶起せしめた。そして彼 (クサヴェリウス) を隊長とし、勝利の保證を以て (——即ち彼の如きを隊長としてゐることは、とりもなほさず勝利の保證を得たも同じであるが) 斯くも少數の軍隊は堅固を極めた町、キリストに謀叛せる町に進軍して行つた。さて町の近くに近づいた時、此の神の人 (クサヴェリウス) は立ち止り、祈禱に專念した。すると立所に附近の山が大いなる火を吹き出したのである。そして町の城壁も高處に築かれたどりでも、その高さが同じ位になつた程の (埋まつた程の) 灰と輕石の巨大な量が噴出されたのである。と同時に恐

ろしい地震が町中を搖すり、大部分の家屋を倒壊せしめた。此の災禍に住民は驚き恐れ町を棄て、附近の森に逃げ込んでしまつた。それが爲に町はフランシスкусの軍隊に依つて、苦もなく占領されるに至つた。市民は彼の足下に平伏し、救ひの悔い改めに服し、罪の赦しを懇願した。

その後、此の同じ諸島の間をフランシスкусが渡つた際、極めて恐しい暴風が起つた時、彼はそれを鎮める爲に、彼がいつも頸に掛けて持つてゐた十字架像を海に浸した。所がそれが暴風の力で彼の手から (吹き拂はれて) 奪はれ、彼に少からざる悲しみとなつたことには、海底へ沈んでしまつた。然し主はその僕の心を喜ばしめ給うた。と云ふわけは、彼が上陸して岸邊にそうて歩いてゐた時に、一匹の海蟹が波間から忽然と飛び出して來た。そして彼の足下に立止つた、(見れば) その十字架像を鉄にはさんで高くもたげた儘。そこでフランシスкусは跪いて恭しく受け取り、長い祈禱を以て、かくも著しい御恵みを給はつたことを神に感謝した。

天主が人類の光りにとて御降し給うた此の僕 (クサヴェリウス) に、なほ豫言の力をも與へて光輝あらしめ給うた。のみならず幾多の實例を以て此の著しい賜 (たまゆの) を (彼に御與へ給うた事) 御示し給うた。種々の例の中に次の

もあつた。大部分マボメット教徒(Turcae)であつた所のアケニー族(Aceni)が六十隻の艦隊に乗り、キリスト教徒の艦隊を焼き、多數(のキリスト教徒)を最も残酷なる苦しみにあはしめた爲に。二百三十名の兵が八隻の船に分乗して、フランシスクスの説得に動かされ、萬軍の神の御名に於て起つた兵の必勝を約束されて、此の野蠻人の艦隊を追撃したのであつた。一ヶ月は既に経過したが、(遠征した)彼等から、皆が心痛してゐるのに一人の使者も(消息を齎して)來ず、味方の者の無事は最早や絶望してゐた。時に、フランシスクスは聽衆に、戦があつた丁度その時刻に、兩艦隊の海戦とキリスト教徒側の輝かしい勝利とを、恰も(戦場に)居合はしてでもゐたかの如く正確に語つて聞かしたのである。更にその状況の報告を齎す使者が到着するであらう日をも豫言したのである。皆の者の非常に驚嘆した事には、此等の事が、彼が豫言した丁度その時刻にすべて眞實であつたと云ふ事が信據す可き報道に依つて證明されたのである。

又二隻の船が同時に港を出帆した時に、フランシスクスは次のやうに豫言した。大いなる暴風が起つて、一方は難破するであらう。一方は——此の方に彼は乗船してゐたのであつたが——海のあらゆる危難をのがれ船渠に於て壊れ解けるに違ひない、と。此の豫言はそれぞれの

出来事に依つて實現されたのである。即ち一方の船の破片が程なく見付けられたからである。又も一方の方は多くの航海を無事に果し、彼の豫言が有名になつて「聖父の船」と呼ばれ、何處へ行つても到る所で歓迎されてゐたが、永年の後修繕の爲船渠に入れられてゐた時に自然に壊け解けてしまつたからである。

又アンボイナ島(Ambona)に碇泊してゐた葡萄牙人の船と西班牙人の船に黒死病が猖獗してゐて、此の聖者(クサヴァリウス)が、いつもの如く病者の看護につとめてゐた時のことである。アラウスイウスのヨハン・ネス(Jeanne de Arausio)に、病氣の爲に用ひる葡萄酒を呉れるやうにと頼んだのである。所がアラウスイウスは自分用のが缺乏しあしまいかと懸念して、しぶしぶ少量だけを贈つて寄こした。そこで此の神の僕は彼に忠告して、慈善事業にはもつと鷹揚であつて欲しい、と云ふのは彼が間も無く生命を失ひ、そのすべての財産は貧者の用に供せられてしまふに至るであらうと云つてやつた。それから、その後間もなく、其處から二百哩餘も離れたテルナーティス島(Ternatis)に赴いて彌撒の祭式を行つてゐた時に、人々に向つて、「皆さん祈つて下さい」——「アラウスイウスのヨハン・ネスの魂の爲に。彼は只今死にました」と云つた。誰も皆唖然としたこと

には、それより十二日経つた後に遂に一人の使ひがやつて來て、聖者の見た幻影（豫感）は全く眞實であつたと立證したアラウス・ウスの死の報告を齎らしたのである。

メリヤポル（Meliapor）を出發しようとしてゐた或る商人が友情の記念に何か贈つて戴き度いと彼に願つたので、神の僕はいとも永福なる童貞マリアの念珠を乞はる儘に頸から外して與へた。そして、それを身に附けてゐる限りは、どんな海上の危難にも無事にのがれることであらうと斷言した。所が港を出帆するやその商人は難破の災難に遭つた。そこで木片を集めて急造した筏に、他の乗船者と共に、乗つて避難した。その時、大海の眞中に在つて、正氣を失ひ、神の僕フランシスクスと、かの念珠を乞うて貰つたその場處て、語り合つてゐるやうな幻影を見てゐたのである。その筏に飛び乗つた日から五日の後遂に、心の幻覺から、丁度深い眠の夢から醒めたやうに眼が醒めて見ると、筏も見えなければ、仲間も一人も見えず、自分獨りがメリヤポルの近くのネガバタース（Negapatamus）の海岸に怪我もなく無事に打ち寄せられてゐたのである。

又或る慈善事業の爲に非常に喜んで神の人（クサヴェリウス）に金を寄附してゐたペトウルス・ヴエルリウス

(Petrus Vellius)に向つて、彼が決して（生活に）必要なものに事缺くやうな目に遭はないであらうし、又豫感に依つて自分の死の時刻を前以て豫知するであらう、と断言したが。此の豫言は二つながら適中したのである。

と云ふのは、ペトウルスは如何にも莫大な財産上の損失を蒙りはしたが。然し誰からも常に極めて厚遇されて暮してゐたのである。又幾年か永年経つた後に遂に死の時刻のせまつた事が啓示され、彼は教會へ行つて棺の中に入り、彌撒を拜聴して豫て自分の靈魂の救ひの爲に唱へて貰ひ度いと願つてゐた祈禱を聽いた後、その場で直ちに安らかに死の眠りに就いた。

§ 4 遂に此の神の人（クサヴェリウス）はその巡歴の旅路を幸の内に全うし、聖者であるとの名聲に輝き、良き行ひに満ちあふれ、主より太祖アブラハムの賜はりなる如き祝福を靈的に賜はり、即ち彼は多くの民族の父となりて、彼がイエズス・キリストの爲に生みたる子（信徒）の天空の星よりも、海岸の砂よりも多く増加せるを見、又その（信徒の）内からは己が血を以て飾られたる（殉教者を指すか？）者を幾多天國に送つた。印度のすべての諸國から、又全世界のキリスト教國から「東洋印度の使徒」と呼ばれるに至り、又その間には、廣大極りなき支那帝國に福音の浸潤を計り、神の光榮の爲に人力を

超越して忍んだ不撓の勞苦に粉骨碎身し。支那の近くの島に於て、主の紀元一千五百五十二年十二月二日に、神と共に永遠に支配す可く天上の榮光に向つて昇天したのである。

* アラブハムの祝福について創世記二十二章十六節より十八節まで参照。

死後の彼の遺骸は、肉は失せても骸骨だけ印度へ送れるやうにと、生石灰をつめて、木製の棺に收めて、埋葬された。四ヶ月後掘り出して見ると、突然最近埋葬されたばかりかと思はれる程、未だ新しく且つ柔軟で、衣服の如きは完全を保つてゐたのである。そして、その遺骸には何等の香料をも用ひはしなかつたにも拘らず、神の御恵みに依り、あらゆる香料をしおぐ程のかぐはしき香を發してゐたのである。

そこで再び、石灰をつめて、東洋印度に於て最も有名なる町マラカ (Malaca) に運ばれた。此の町に於て當時極めて恐しい疫病が日々多數の人命を奪つてゐたが、神は大いなる御慈悲を垂れ給ひて彼 (クサヴェリウスの遺骸) の到着を啓示し給うたのである。と云ふのは、(クサヴェリウスの) 聖なる遺骸が此の町に運び入れられるや、疫病はピッタリと止み、その時から誰一人最早や罹つた者が出なかつたのである。そこで棺は再び開かれて

見ると、(遺骸は) 以前の如く完全を保ち、又、以前と同様の馥郁たる香を發つてゐたのである。又、新しい棺に入れようとした時に、棺が狭かつた爲に肩が少し押しつけられて、その肩から新しい血が流れ出た。

死後九ヶ月目に、遂に又墓が開かれた、すると又以前の如く神の御力に依り未だ腐敗をまぬがれ、天上の芳香を放ち、顔を覆うてあつた布が、上に盛られた土の重みの爲に、(出血した) 新しい血に染められてゐたのである。此の遺骸は最も大切な (保管) 物として、錦襷の布に覆はれた棺に入れられて印度へ、コッキヌス (Coccus) (コチニ) と云ふ港へ運ばれた。そしてイエズス・キリストとの關係に於て共通なる父 (クサヴェリウス) の遺骸を拜さん爲にその (印度の) 民族の大部分の人々が集つて來た。

そこ (コッキヌス) から更に極めて莊嚴なる儀式を行つてゴア (Goa) に移送され、副王及び市民のあらゆる階級の雲集と深い尊敬の念とに迎へられ、イエズス會の聖堂に於て、人々の崇敬の念を満足せしめんために、頑丈な柵で圍つて三日間誰の眼にも見られるやうにして置かれた。そして併の副王の命に依り著名な醫師と、ゴアの副司教とがやつて來て (遺骸) 全體に亘つて觸診して見ただところ、いづれの部分も腐敗して居らず、内臓さへも

完全を保つてゐると云ふことが發見された。のみならず（試みに）付けた小さな傷口から新鮮な血が流れ出た程であつたのである。

その時のことである、或る女が情熱的な崇敬の念にかられ、接吻せんとよそほひ、足の指を切り取らうとして、噛みついたのである、すると忽ちに血が迸り出でた。然し最も高くまします神の御恩寵は、斯くの如き數々の不思議を此の聖者の身に起し給うてすべての人々の眼に御示し給うたばかりでなく。常に彼（クサヴェリウス）を仲介として信仰厚く神に御願ひする者には必ず大いなる御恵みを垂れ給うたのである。此の事は、その例極めて多いが、殊に次に挿入する例に明かなことである。

ゴアに生れた或る少年が、生れつき足が萎え、脛が乾き、その足では立つことが出来ず、やむなく手で這つてゐたのが、乳母に連れられて此の神の僕の墓へ来て、以後九日の日参をしようと決めた。その誓言を果し始めて、墓詣での三日目には最早やその子は乳母の膝の上で立ち、突然墓の鐵柵に手でつかまつて、自分の足で立ちようよろ歩き始めたのである。そしてその時から全く健康になつた、かくて彼が願を掛けた九日間の間に脛は肉に満ちた。斯くていつも丈夫で、その後は健康に暮したのである。

東洋の印度の町コッターラ (Cottata) に於て、生後一ヶ月になる子供が死に、埋葬すべく用意してゐた。兩親は深い信仰を以て、若し子供が甦つたならば、神の僕

(クサヴェリウス) の墓に莫大な捧げものをし、又子供にはフランシスクスの名を付けようと云ふ誓願を立てた。すると忽ちにしてその子供は眼を開き、手足を動かし、又泣き始めたのである。かくて彼等（親達）は啻に命を取り戻したばかりでなく、全く健全な又無病なる子供を受け取つたのである。で無限の喜びを以て彼等は誓ひを果し、斯くも著しい奇蹟をその國中に言ひ廣めた。

同じその町で、或る盲者の夢に此の聖者（クサヴェリウス）が現はれた。そして彼に訓へた、彼の聖堂へ行け、躊躇することなくそれを續けよ、其處で視覚は再び得られるであらう、と。その男は忠實に（その言に）従つた、すると、フランシスクスの繪の前で九日間祈つてゐる内に、忽然として、盲目の暗は全く散じ、健全になり、完全に見えるやうになつた。

それのみか更に、同じその場處で、或る癩病患者が、大いなる信頼を以て此の聖者の仲介に頼つたことがあつた。彼（クサヴェリウス）の繪の前にともされるランブの油を自分の體一面に塗つて、ひれ伏して祈つてゐる中に、忽ちにして癩病から拭はれ、全く健全な體となつた

のである。

それと同様な（奇蹟の）力（靈驗）をフランシスカ・ラベルス（Francisca Rabelles）と云ふ婦人が経験した。と云ふのは彼女は久しい以前から血液過多と、甚だしい苦痛をともなふ腹の膨脹に悩んでゐた。所で、彼（クサヴェリウス）の繪の前に吊られてゐたランプの油を再三再四五體に塗つた、すると忽ち、完全に健康に復し、以後はもはやその病氣の後遺徵候を全然感ぜぬ程になつた。

又斯う云ふことが起つた事も屢々あつた、即ち此の神の僕（クサヴェリウス）の繪の前に下げられた數々のランプが、只だ單に聖水（Aqua benedicta）を注入したのみで、恰も油を満たされたかの如く、燃え輝いたことである。斯くも不思議なる奇蹟を目のあたり見るやうに見て、唖然とした。これは我々の信仰を擴める上に大いなる貢献となつた。

コッキエンヌイスの町（Cocceniensis ciuitas）に住んでゐたグンディサルウス（Gundisaluu）は、胃に〔原文には pectus=普通、心臓、心、精神、胸部〕の字が用ひられてゐるが、佛譯には stomach と譯れてゐるから、佛譯に従つておく〕絶えざる苦痛を起してゐた所の痼疾

の瘤腫を治さうとあらゆる醫療の術を盡したが効果がなかつたので、神力にすがらうと心を變へ、全能の神の御慈悲に懇願した、何卒福者フランシスクスの功德に依り健康になし給へ、と。そして銅に彫られた彼（フランシスクス）のメダイを患部に當てた。するとその瞬間からすべての疾患から癒えて健全な體になつた。

同じ町の市民、エマヌエル・ロドゥリケツ（Emanuel Rodriguez）は、兩足に一面に出來物が出來、且つ神經のひつたりの爲に全く（足が）虛弱となり立ち上ることさへ出來ない程であつた。之等の疾病にかけて加へて烈しい重い痢疾が併發した。醫師達は彼の生命を見放したので、此の患者は神の僕フランシスクスの仲介にすがつた。そこでその同じ像を以て自分の體に十字の印を描き、その像を浸した水を飲んだ。すると彼は天主の御力の驚く可き効果を得た。即ち三日と經たずに彼は全部の病氣から癒え、完全なる健康を得るに至つたのである。

それと同様な神の僕の効力をマリア・ティアフ（Maria Diag）もまた感得した。と云ふのは彼女は七年もの間、盲目と中風症に悩み通してゐたが、不自由な手足の上に十字を描き、その（クサヴェリウスの）メダイを浸すことによつて神聖にされたる水を以て洗つた、すると七日と經

だすに視力も體の健康も、神の御恵みに依りて得たのである。

* 無論、この効力は聖者の繪又はメダイにある譯ではなく、

此の繪の前で聖者の取次ぎをもつて天主に祈ると、天主は其の祈りをききいれて奇蹟を行ひ給ふ。これは教會の教へである。繪そのものの力によることは迷信になる。

§ 5 斯くも幾多の、斯くも著しい之等の不思議なる業を全能の天主は御力によつて彼の僕を光輝あらしめ給ひ。又斯くも幾多の奇蹟の評判が世界中にあまねく擴まり。又それが爲にキリスト教徒が彼に對して抱く信心の熱情が深くなつたのみならず、加ふるに多くの不信者の心もへも神と又我等が主イエズス・キリストとを識るに至つて光明を得たが故に、獻身の熱情に燃えた、先きに述べた葡萄牙の王ヨアンネス(Ioannes) は、諸處方々の司教(Ordinarius) の手に依つて彼(クサヴェリウス) の聖徳(Sanctitas) 及び(彼に依つて行はれたる) 奇蹟に就いての調査が行はれるやう、獎勵するに至つた。

彼等(司教達) がその任務を丹念に遂行し、時が経ち(調査が) 進み、(クサヴェリウスの) すべての調書が此の教皇の許に送られた時に、當時彼(グレゴリウス) の先輩であり、又余の先輩でもある教皇、想ひ起すも尊敬す可き故パウルス五世は、西班牙の王にして公教信徒なるフ

イリップ二世の、神の僕を謹聖するやうにとの懇請にも動かされ、初めは當時宗教法院の陪席判事であつた、想ひ起すも德高き、故ホーラーチウス・ランケロットウス(Horatius Lancellotus) に彼がカルヂナールの榮職に上げられて後同じく宗教法院の院長で、(我が) 親愛なるヨアンネス・バブチスタ・コッキヌス師(Joannes Baptista Cocinus) 及びなほ、當時ダマスクスの大司教であつて宗教法院の陪席判事の位置にあり、その後聖羅馬教會の樞機卿になりたる、想ひ起すも善良なる故フランシスクス・サクラートウス(Franciscus Sacratus) に命じ。前の諸調査を檢べ、教皇廳の權威に依つて新たに履むべき手續を、充分至當と思はれる迄に確定せしめ、彼等の意見の一致を見た上、先輩パウルスの許へすべてを報告せしめた。で彼等は西班牙や葡萄牙や印度の諸王國の諸處方々に居る司教達に照會の手紙を出すことに定めた。そして彼等自身も教皇廳に在つて、新たなる證左を研究することにした。そしてその上述の判事達が各自の任務を果した後に、彼等は自身調製したる調書を陪席判事達(auditor) の許へ通牒した。彼等は、(問題が重大なだけにその重大性にかんがみて) 充分の極度の熟考と時間を費して萬事を審査熟考した後、神の僕ランシスクスの生涯の聖性に就いても、勝れた諸徳に就いても乃至は、

彼の生存中に於ても又幸福なる死を遂げた後に於ても同

様に、全能の天主がかしこくも彼の功德及び取次ぎとを
かへりみて行ひ給うたる數々の奇蹟に就いても、充分根
據あることであると證明し、若し教皇の裁可があれば、
彼は聖者(Sanctus Confessor)の名簿に登録されるに充
分資格ありと信する旨の回答を、彼等は我が先輩パウル
ス教皇に言上した。然しその間に先きに述べた余が先輩
パウルス(教皇)は此の世の命を果てられ(他界され。)先
に述べた余が先輩グレゴリウスが神の御攝理に依り聖
職の最高位(教皇の位置)を繼承された。そしてキリスト
の御名に於て我々の、當時は彼の今我の最も親愛なる
即ち西班牙の王にして「公教の王」なるフィリッ普ス三
世より、此の問題を繼續するやう、又一層の進捗を見る
やうとの懇請を受け。その他の領主や、司教や、印度中
の聖職に在る者などが一様に切にそれを懇願する願書が
増大して來た爲に。先きに述べた余が先輩グレゴリウス
は、斯くの如き重大なる問題はあらゆる熟考を俟つて進
める可きが至當なりと考へ。先に述べた(宗教法院の)
陪席判事(audtores)等の作った報告書を、禮部聖省員
(Sacri Rites)の聖羅馬教會の樞機卿等の許に、此の問
題を出來得る限り細密に検討せしむ可く回附した。

* Rex Catholicus 「公教の王」はスペイン國王のタイトル

であつた。

§ 6 彼等が此の問題を詳細に検討し終り全員一致して此の神の僕(クサヴェリウス)の謚聖を妥當とみなす意見に達したので、ポルト(オスチアの港の地方)司教で、聖羅馬教會の樞機卿なる、想ひ起すも善良なる故フランシスクス・マリーア・デー・モンテが、余の先輩で、先に述べたるグレゴリウス及び、當時彼の兄弟^{*}であり、余にとつてもまた兄弟なる、尊敬す可き、聖羅馬教會の樞機卿等——當時余もその一員であつたが——の出席の下に開かれたる傍聽禁止の樞機卿會議(Consistrium)に於て、此の問題全般の経過の要約と、彼自身の意見及び彼の同僚の意見を闡陳した。それを聞いて(出席の)他の樞機卿等は全員一致して、此れから次ぎへと進出すべしと宣言した。

* 「兄弟」は教皇の司教に對する呼掛け。

** 即ち調査は完了して後に謚聖へ進出するを得べしとの意味。

そこで、公開樞機卿會議に於て當時樞機卿會議員の辯護士(Aula Consistorialis)であつたイユーリウス・ザムベツカーリウスが、此の神の僕(クサヴェリウス)の生涯とその徳に就いて曾て極めて廣汎に論述し、然る後、かの「公教の王」なる、ヒスパニア王の、此の謚聖實現

を願ふ懇請を開陳し、辭をこめて彼（教皇）にその手續を進め給へと懇願したので、先述の余が先輩グレゴリウスは、先述の（ヒスパニア）王の敬虔と比類なき熱意とを王の御名に於て賞され、斯くの如き重大なる問題に就いては、かの聖羅馬教會の樞機卿等並びに羅馬聖廳(Curia Romana)に出席する司教等の意見を徵す可きであると答へた。と同時に彼（教皇）は主の御名に於て心の奥底よりの眞情を以て樞機卿及び司教等を説き、あらゆる謙讓と、涙と、斷食と、施捨との裡に、道であり眞理であり給ふ主に祈願して、主が彼をして其の（即ち主の）道を導き進ましめ給はんやう。即ち彼をして眞理の道を得しめ給はんやう、又主の御神助に依りて主の嘉し給ふ所（御意向）を感得、遂行得しめ給はんやう、祈つて呉れと說いた。

その後開かれた半公開的な樞機卿會議(Consistrium)に於て——教皇は此の會議には、啻に樞機卿のみならず聖廳に出席せる總大司教(Patriarcha)を始め大司教(Archiepiscopi)及び司教に至る迄召集を命じられ、又聖座(Sedio Apostolicae Natarii)に屬する秘書等及び聖廳の訴訟に屬する陪席判事等(auditores)も出席したが——その會議に於て教皇は神の人フランシスクス・クサヴェリウスの優れた生涯と奇蹟(miracula)に就いて

充分に論述し、此の神の優れた僕が我等の主イエズス・クリストゥスの御名に於て如何に大いなる苦難をなめたか、又、未知の民族の間に神の御言葉を時々傳へて（天主はその種子の成長を與へ給ふながら）如何に大いなる成果を收めたかを述べ、此の余が先輩グレゴリウス自身に向つて、（ヒスパニアの）公教の王を始めとしてその他キリスト教國家の君主及び領主よりなされたる懇願を列舉した後、各自の意見を徵した時、神を榮えあらしむる者共には榮福を授け給ふ神をたたへ乍ら、全員異口同音に神の僕フランシスクス・クサヴェリウスを謚聖する可し、謚聖者(Sancti Confessores)の列に加ふ可し、との意見の一一致を見た。

此等の人々全員一致の賛同を聞いて、彼（教皇）は我が救主たる天主に於て悦び、我等が徳の榮えなる神に、其の思召しによつて我等の力をあらゆる敵の力に打ち勝つを得せしめ給ふ神に、今日此の日斯くの如き光を以て教會を光輝あらしめ給ひ、又新たなる庇護を垂れ給ひて教會を守り給ひし事を深く感謝した。

そこで、彼（教皇）は謚聖式の日取を公表し、而して彼の兄弟及び子等に父の如き愛を以て訓示し、あく迄善事を行ひ、以て慈愛に満ち給ふ神に、彼等が上に安らかな御顔もて庇護を下し給ふやう、又彼等が行ひ神の御心

に添ふやう導き給へと祈れ、と教へた。

* 兄弟は司教の尊稱、子は信徒。

§ 7 さて遂に、聖法規と公教會の慣例上當然ふまねばならぬだけの手續きを凡て完了した後、彼の在位二年目の三月十二日に、彼(教皇)は教皇のいとも聖なる使徒(聖ペトロ)大聖堂に於て、かの樞機卿等を始め總大司教等、大司教等、司教等、羅馬聖座の高位聖職者(Praelati Romanae Curiae)彼直屬の役人、使僕、世俗及び修道會の聖職者及び民間の極めて大いなる群衆と會合した。その時、謚聖の勅書とキリストの御名に於て、我が最も親愛なる子にして、當時、彼の余が愛する子にフーリップスの名代として、當時、彼の余が愛する子にしてかつ肉體上彼の甥にあたる、サンクタ・マリーア、トランスポンターナ(Transponenta)聖堂の樞機卿ルド・ヴィコ・ルドウイシより、先述の(聖法院)辯護士イュー・リウス・ザムベッカーリウスによつて提出された願書とがもう一度朗讀されて後、祈禱と連禱とを唱し、いとも聖にして一天主なる三位一體の榮譽の爲に、又教會の信仰の繁榮との爲に、聖靈の聖寵を敬虔に祈願した上、全能の天主なる父と、子と、聖靈及び使徒聖ペトロと聖バウロ及び教皇自身の權威を以て、又かの羅馬聖廳に出席せる聖羅馬教會の樞機卿、總大司教、大司教、及び司教

等の意見と全員一致の賛同とを得た上、想ひ起すも輝しき故フランシスクス・クサヴェリウス——その生涯の聖性とは充分もはや證明が立つたが——は聖者なりと決定し、證聖者の名簿に登録す可きであると宣言し、登録した。そして全世界のキリスト信徒に、眞に彼こそは聖者なりとして、尊敬し、崇敬す可し、と命令した。

§ 8 そして彼(クサヴェリウス)を記念するための、天主に彌撒を獻ず可き聖堂や祭壇を、全公教會の手に依りて建立するも獻堂し得るやう年々、彼が天上の光榮に召されたる日、即ち十二月二日に、彼に對する典禮、即ち證聖者(Sanctus Confessor)の要文を羅馬聖務日課書の法規に従つて行ひ得るやう、規定した。

§ 9 又同じ權威を以て、キリスト信徒は誰にても、眞に罪を悔い改め、悔悛の秘蹟を受け、年々其の祝日(festusdays)に彼の遺骸の安置されてゐた墓に詣でた者は、一年と四十日間(unus annus, et una quadra quena)の贖宥を、又、彼の祝日後の八日間の内に詣でた者には四十日間の贖宥を、慈悲深くも、主の御名に依りて、許した。

§ 10 最後に、絶大なる喜悅の裡に神に、すべての民族の眼前に此の聖者を賞譽し給ひ、且つ、斯くも赫々た

る光輝をもちて我が教會を飾り給ひしを感謝し、聖フラ
ンシスクスの榮譽の爲に、證聖者の嚴肅な祈禱を唱し、
使徒聖ペトロの祭壇に新證聖者を記憶し乍ら彌撒を舉行
し、且つ出席せし全キリスト教徒にあらゆる罪の全贖宥
を許した。

§ 11 然しながら、(謐聖の) 斷定、勅令、登錄、命令、訓
令、規定、贖宥、その他前述した諸事項に就いて、(か
の余が先輩グレゴリウスの教書が、彼の突然の他界の爲
に、書かれずにしまつたが故に) 何か萬一疑義を生ずる
事なからしめん爲、余は此の斷定、勅令、登錄、規定、
贖宥と其の條件及び上述の諸事項が、前述の三月十二日

より、恰もかの余が先輩グレゴリウスの之等に就いての
教書が丁度その日附に書かれた事として、その日から當
然有す可き効力を發生せしめんと欲し、教皇たるの權限
を以て今迄述べ來つた事を發令する。又、余は此の教書
が斷定、勅令、登錄、會合、規定、贖宥及びその他前述
せる諸事項を、いづくの地に於ても眞なりと證明するに
充分であり、且つ、これ以上何等證明となる依據は必要
なかる可きを欲す。

§ 12 尚ほ又、此の教書が必要に應じ、何處の地にも持
ち運ぶは困難であらうから、印刷に付して此の教書の寫
しを作り、公の書記 (Notarius publicus) の署名を附し、

教會の高位聖職に在る者誰れかの印を附して確證せし
め、以て何處に於て發表され公表さるも常に此の教書
の有すると同様の信用を保たしめ度いと余は欲する。

§ 13 されば何人たりとも余が命令と余が意志を盛
る此の書を犯す可からず、無謀にも不敵に之に逆ふ事を
許さず。然して、若し僭越にも之を犯さんとする者あら
ば、全能の天主の御怒、福者なる使徒ペトロとポウロの
怒をかうむると知る可し。羅馬にて、聖ペトロの堂に於
て、主の御降誕千六百二十三年、八月六日、余の在位第
一年之を發す。

十 余、公教會の司教ウルバーヌス
十 余、ルチーナに於ける聖ラウレンティウス聖堂名
義司祭樞機卿ドーミニクス・ギュナースイオス
十 余、聖ネレイウスと聖アキルレウス聖堂名義司祭
樞機卿P・クレスケンチオ
十 余、聖ペトロ・イン・ウイニクラ聖堂名義司祭樞
機卿

十 余、サンタ・クロ・チエ・イン・イエルサレム聖
堂名義司祭樞機卿G・ポルヒヤ
十 余、聖プリスカ聖堂名義司祭樞機卿Tib・ムー

十 余、聖アレクスイウス聖堂名義司祭樞機卿 R O B
・ウバルデノニ

十 余、聖サビーナ 聖堂名義司祭樞機卿 イユーグウ
ス・サベリ

十 余、聖マリーア・デー・ボブロー聖堂名義司祭樞
機卿 ギドー・ベンチオリヨ

十 余、聖キリクスと聖イユリックタ聖堂名義司祭樞機
卿 M・ランテ

十 余、聖マリーア・スペル・ミネルワム聖堂名義

司祭樞機卿 イウーリウス・ローマ

十 余、聖クレメンス聖堂名義司祭樞機卿 F R・デー
スイデーリウス・デー・クレモーナ

十 余、聖パンクラチウス聖堂名義の聖羅馬教會樞
機卿 コスマス・デー・トルレース

十 余、C・聖ニコラオ・イン・カルチン聖堂名義助
祭樞機卿 ピオ

十 余、聖マリーア・ノーワ聖堂名義樞機卿及び羅馬
聖廳會計院長官ヒッポリトス・アルドブラン

ディーニ

十 余、聖羅馬教會の助祭樞機卿 A・de・laクエツ

× × ×

本文中ザビエル歸天の日は十二月二日となつてゐるが、

一六六三年(寛文三年)七月十七日附教皇アレキサンデル
七世の諭告によつて十二月三日と改められ今日に及んだ。

ザビエル歸天の詳細については「聖フランシスコ・シャビ
エルの終焉」吉田小五郎 史學十二卷二號昭和八年)參照。